COVID-19感染拡大下における、現地開催型イベントの感染防止策の変遷：2020年から2022年まで開催された国内の特撮・アニメイベントを対象に

東海大学大学院文学研究科文明研究専攻
二重作　昌満

発表目次

1.研究の背景
2.研究の目的・対象・方法
3.結果
3-1.試行錯誤期（2020年）
3-2.夏季催事再開期（2021年）
3-3.発展期（2022年）
4.考察
5.まとめ

1.研究の背景

- 2019年に中国・武漢で確認された新型コロナウイルス（COVID-19）は、
  その後世界的に拡大するように。
- 我が国にも2020年2月より当ウイルスの脅威に次第にさらされていく
  ようになり、3密の回避や緊急事態宣言の発令等に伴い、
  数多くの商業施設も閉鎖される事態となった。

(レジャー施設)**東京ドームシティアトラクションズ**：2020年3月1日～8月1日
東京ディズニーランド：2020年2月29日～7月1日

1.研究の背景　その2

しかし2020年の夏季以降になると、**いかにイベントを再開するかについて試行錯誤**を実施する潮流が見られ、例えばアニメや特撮等の我が国のポップカルチャーを牽引する各映像制作会社は、来場者に在宅を促す形での**オンラインイベント**の開催や、**消毒の徹底等**、
新ルールを備えた形でイベントを復活させ、現在までイベント開催を継続させてきた。
つまり今回のCOVID-19の感染拡大は、イベントのオンライン化やウィズコロナを念頭に置いた感染防止策等、イベント開催形態の変化をより加速させる事態を促し、
これらは**ひとつの時代の転換点**として、将来的に訪れるコロナ禍後の時代、
即ち**アフターコロナ時代に向けて記録していく必要がある**と考えた。

1.研究の背景　その3

COVID-19感染拡大下における、アニメや特撮等、我が国のポップカルチャーを誘致資源化したイベントの現状について、発表者はこれまで、特撮やアニメ作品を誘致資源とした観光現象である**「特撮ツーリズム」**及び**「アニメツーリズム」**に対する継続的な調査を国内外にて行なってきた研究成果も活用しながら、コロナ感染拡大以前から現在にかけて、両観光現象が**COVID-19の影響を受けてどう変化してきたか**、また現在まで**いかに観光を持続させてきたか包括的な記録**を実施してきた。

・2019年度博士論文「特撮ツーリズムの歴史と行動特性の類型化」
・2020年　日本観光研究学会：「米国ハワイ州での特撮ツーリズムの発展と浸透の歴史研究」
・2021年　ICICIC2021（The 15th International Conference on Innovative Computing, Information and Control）
：Changing the form of leisure tourism under the COVID-19 pandemic: The case of online events

⇒**コロナ感染拡大以前の状況、及び感染拡大後の取り組みについて継続的な調査を実践済み。**

2.研究の目的・対象・方法　その1

そこで本研究では、筆者がこれまで包括的な研究を実施してきた、

「特撮ツーリズム」及び、「アニメツーリズム」に焦点を当て、

事象としての観光史を明らかにする歴史学的な観点から、国内で初めてCOVID-19が確認された2020年から2022年現在にかけて、特撮・アニメ作品を誘致資源化したイベント会場では、**感染拡大に伴う施設の閉鎖から再開、現在に至るまでどのような感染拡大防止策を実施してきたのかを時系列的に纏める研究**を実施した

⇒緊急事態宣言や「まん防」等、変動するCOVID-19感染拡大下の社会情勢において、我が国の特撮ツーリズム及びアニメツーリズムはどのように対応してきた？

2.研究の目的・対象・方法　その2

研究の目的：映像作品を観光資源化したコンテンツツーリズム研究の一環として、
「特撮ツーリズム」及び「アニメツーリズム」に焦点を当てながら、
2020年から2022年までの約3年間、COVID-19の感染拡大によって、
特撮・アニメ作品を誘致資源化したイベント会場が実施してきた
感染防止策について時系列的な記録を実施することにある。

調査方法：①現地調査、②オンライン調査、③資料調査から成る3種の調査方法を実施

①現地調査：2020年8月1日から2022年5月1日にかけて全40のイベントに赴き、
現地巡検という形でのフィールドワークを実施。

②オンライン調査：2020年2月1日から2022年4月30日にかけて国内で開催された、
Webサイト上での全48のオンラインイベントを対象に催事内容の記録を実施。

③資料調査：コロナ禍で開催されたアニメ・特撮イベントに関する文献やWebサイト等の収集の他、現地調査での参加が叶わなかった催事の資料収集も併せて実施。

3.結果

我が国の特撮ツーリズム及びアニメツーリズムは、COVID-19の初確認から現在までの約3年間、催事の休止から段階的にイベントを再開させてきたことが明らかになった。
そこでこれら3年間を、COVID-19の対策の変遷についてより明確化できるように、1年ごとに**3つの時代に呼称をつけて類型化**し、
各時代の動向について纏めた。

①試行錯誤期（2020年）
②夏季催事再開期（2021年）
③発展期（2022年）

3-1. 試行錯誤期（2020年）

2020年は、我が国でCOVID-19が急速に拡大し、三密の回避や緊急事態宣言の発令等に伴い、施設の閉鎖やイベントの中止が次々に発表された。しかしイベントの開催側である映像制作会社らは、予定されていた現地開催型イベントの代替として、オンラインイベントの考案の他、マスク着用や消毒の徹底、発声の禁止等を来場者に呼びかける形でのイベント再開に動き出していくようになった。つまり、2020年はCOVID-19の影響を受けながらも、中止されたイベントをどのような形で再開できるのか試行錯誤的に実施していた時代であった。

⇒そこで本研究では、2020年を「**試行錯誤期**」と纏めた。

（例：東京ドームシティアトラクションズ　シアターGロッソ）

・8月1日からスーパー戦隊シリーズのショー公演を再開

・来場者に対するマスク着用の推進や手指の消毒等を推奨

・劇場入場前のレッドとの握手会等、**一部サービスを休止**

・子ども達へヒーローに対する**「がんばれ」等の声援の自粛**を要請、
　代わりに拍手や、会場内で販売されているペンライトの使用を推奨。

3-2. 夏季催事再開期

2021年以降、2020年に開催が中止された夏季恒例催事が、感染防止策等の新ルールを備えた形で次々に再開されるようになった。この背景には、各映像制作会社がウィズコロナを念頭に置いて、いかに催事を行なえば感染を防ぐことができるかについて、次第にノウハウが構築されてきたことが挙げられる。

⇒そこで本研究では、この時代を「**夏季催事再開期**」と呼称した。一概に特撮・アニメ作品の夏季恒例催事は多種多様であるため、本稿では、**池袋サンシャインシティ**にて開催された、2つの特撮・アニメ作品のイベントに着目して概説する。

池袋サンシャインシティでは2021年7月～8月にかけ、円谷プロのウルトラマンシリーズ及び、東映アニメーションのプリキュアシリーズの2つのイベントを同時期に開催。両イベント共に、展示エリアとステージエリアの2段階で構成されていた。つまり、**来場者の行動を順序化し、逆走できない仕組みを導入。**

（※また、ショー観賞時のキャラクターへの声援等、発声の禁止を来場者に要請。）

両イベントの著作元は異なっているものの、イベントを開催する上での共通したルールや手順が、各社にて構築され

るようになってきたことがこの時期の特徴といえる。

3-3. 発展期（2022年）

2022年から現在にかけて、常設施設及びほぼ全ての恒例開催型イベントが再開されつつある。
この時代の特筆すべき点は、イベントを再開させることに加え、**これまで中止されてきた催事内容の一部も再開させる兆候**が確認できるようになった。
そこで、2022年から現在にかけての当時代を暫定的に「**発展期**」と呼称した。

例：2022年2月19日・20日開催　舞台「トロピカル～ジュ！プリキュア感謝祭」

・着ぐるみの実演ショーや出演声優・主題歌歌手によるライブ等の催事内容で実施
・**着ぐるみのキャラクターとの握手会を再開**
⇒上演終了後に、観覧者が会場内に列をつくり、配布された**ビニール製の手袋を着用**して、
　本公演に登場した着ぐるみのプリキュアと順に握手。
・我が国での**感染拡大以降、距離を確保した上での着ぐるみとの撮影会が主流であった。つまり直接的ふれあいを伴う握手会は避けられてきた**が、今後のCOVID-19に対する社会的動向によっては、
更なる催事内容に対する緩和等、
体験できるプログラムの増加等が期待される。

4. 考察

2022年現在、COVID-19の完全な終息は未だ不透明な現状にある。
⇒そこで、現地開催型イベントは今後どう変化していくかについて考察を行なった。
特撮・アニメ作品を題材とした現地開催型イベントは、COVID-19による催事の中止から、段階的に感染拡大前の催事内容に戻していこうとする動きが確認できる。しかし、単に現地開催型イベントの全面的な再開を目指すのではなく、感染拡大を契機に急速に発展を遂げたオンラインイベントも、並走する形で今後成長していくことが考えられる。そこで、ステイホームの推奨や観光のオンライン化が急進した昨今の情勢を考慮するならば、今後ますます体全体を使って催事を楽しむ、即ち「**五感**」を体験価値とした現地開催型イベントが、将来的なニーズとしてより求められていくことが考察できた。

5.まとめ

本研究では、2020年から2022年までの約3年間を対象に、COVID-19感染拡大下での我が国の特撮・アニメ作品の現地開催型イベントの対応策の変遷を時代の類型化によって纏めた。その結果、中止された催事を再開させるために試行錯誤した時代であった「**試行錯誤期（2020年）**」、感染防止策を伴いながら多人数を集客する夏季恒例催事を再開した「**夏季催事再開期（2021年）**」、約2年間で構築された感染防止策に加え、新たな試みが確認できるようになった「**発展期（2022年）**」の**3つの時代に類型化**した。今後の研究の課題として、特撮やアニメ以外の他の映像ジャンルを誘致資源化した催事の感染対策についても視野を広げ、アフターコロナ時代を見据えた記録も実施していく必要がある。

Thank you for your attention